

## 堀河百首題「埋火」をめぐる

### 一

堀河百首題の冬の歌題は、既に指摘されているように、『堀河百首』成立以前にあまり取り上げられない歌題が数多く含まれている。冬の二十歌題のうち、「初冬」「寒廬」「網代」「神楽」「鷹狩」「炭窯」「埋火」は、『堀河百首』成立以前に取り上げられない歌題として既に指摘されている。<sup>①</sup>

それら七歌題のうち、今回は「埋火」を取り上げ、この歌題を『堀河百首』詠出歌人達が、どのように捉え、しかも詠じたかを具体的に検討し、その堀河百首題「埋火」の特徴を考察してみたい。堀河百首題「埋火」は、諸本によって「炬火」という歌題になっているが本稿においては「埋火」として取り上げることにする。

まず、『堀河百首』成立以前において「埋火」がどのように捉えられ、詠まれているかを調べてみよう。

『万葉集』において、「埋火」を詠み入れた歌は管見の範囲では見出せない。また、『堀河百首』成立以前において、堀河百首題と共通する分類が多数見られる『古今和歌六帖』において「埋火」という分類はみられない。だが、同様に、堀河百首題と多数の共通す

内藤 愛子（現代文化学科）

る主題がする『和漢朗詠集』において、冬の一つの主題として「炬火」が見出すことが出来る。あくまでも、それは、「埋火」という主題でなく「炬火」としたのは漢詩文を背景にした主題と言えるであろう。主題「炬火」には漢詩四首と和歌一首が列挙され、和歌一首は業平の詠歌である。

366 埋火のしたにこがれしときよりもかくにくまるるをりぞわびしき

既に、堀河百首題の四季題の六割以上が、先行する屏風歌の歌材になっていると指摘されている。<sup>②</sup> 堀河百首題と関連の深い屏風歌において、「埋火」がどのように詠まれているか見てみると、屏風歌の画題や歌材としては見出すことのできない。

次に、『堀河百首』成立以前の私家集において、「埋火」がどのように詠まれているかみてみよう。

管見の範囲内で「埋火」を詠み込んだ歌例は少なく、『躬恒集』<sup>245</sup>（『私家集大成1』<sup>33</sup>）『赤染衛門集』<sup>491</sup>（『私家集大成2』<sup>13</sup>）においては、「火桶」「すびつ」という関連から「埋火」が詠じられているが、冬の主題として意識されていると捉え難く、冬の歌の歌材として詠じられている。

火をけにむかふ

245 夢にたに見はこそあらめうつみ火のおきゐてのみそあけしはて  
つる

梅の花を折りて、をさなき人のすひつゝにさしたるを

491 うしろめた風ふかすともうつみ火のあたりの花はちりやまさら  
ん

『曾祢好忠集』345（『私家集大成1』105）において、十二月のはじめの歌群に「埋火」を詠じた歌（345）として

345 埋火の下に憂き身と嘆きつつはかなく消えむことをしそ思ふ  
が見出され、この歌は、少なからず、「埋火」を冬の主題として詠じている初出の歌であらう。

また、『相模集』初事歌群に一首（561）見出せる。

561 埋火をよそに見るこそはかなけれ消えれば同じ□□となる身を  
この歌は、春・夏・秋・冬・雑に分かれた初事歌群の冬の一首であり、分類から察すると定数歌と捉えることも出来るだろう。冬の主題として埋火を捉えていることは明らかである。また、埋火のはかなさに身のはかなさを懸け、前掲の好忠の歌と同類の述懐の心を詠じた歌に仕上げている。

次に、『和泉式部集』167（『私家集大成2』1）、『和泉式部集統集』563（『私家集大成2』2）では歌題として見られ、167の歌は、和泉式部百首の61の歌と同一の重出歌である。しかも、この二首（167・563）は初句と五句目が異なるのみで、『和泉式部集』と『統和泉式部集』に共通する冬の歌題の歌群の一首であり、百首歌の一首でもある。いずれも埋火のはかなさに寄せて詠んだ歌である。

うつみひ

167 ぬるひとを、こすともなきうつみ火をみつゝはかなくあかすよ  
なく

埋み火

563 まとろむをおこすともなき埋み火を見つゝはかなく明かす頃か  
な

また、『四條家下野集』148（『私家集大成2』34）においても歌題として見出される。

埋火といふ題を

148 片敷の袖やさえまし埋火の寝覚め床におきさりせは

このように、『堀河百首』の成立以前の私家集において、「埋火」は冬の素材として詠まれており、主題としての初出は『曾祢好忠集』345であり、『相模集』561や『和泉式部集』167・563は、定数歌や百首歌の歌と考えられることから、「埋火」はやはり、百首歌と同様に冬の主題の一つとして捉えらるだろう。しかも、『四條家下野集』において、「埋火」が冬の歌題とされている初出のものであり、このことから、歌題として定着したのは、時代的に新しいもので、しかも定数歌や百首歌の影響と言えるであらう。

次に、堀河百首題の設定に影響を与えた初期百首歌において「埋火」がどのように詠まれているかみてみよう。

まず、初期百首歌を見てみると、「埋火」を主題とした歌は好忠百首に見出だせない。百首歌においては「相模集」（『私家集大成2』29）の湯走百首A（275）B（374）の中冬や前掲の『和泉式部集』69（『私家集大成2』1）の和泉式部百首の冬の歌群に一首（61）「埋火」を主題とした詠歌が見出だせる。

275 埋火にあらぬわか身も冬の夜におきながらこそ下にこかれる  
374 埋火も君にもあらぬあま舟も冬はうきよにこかれてそゆく  
69 むる人を、こすともなきうつみ火をみつつかなくあかすよな

このように、初期百首歌において「埋火」が冬の主題として見出せないが、百首歌の詠出している『曾祢好忠集』<sup>345</sup>において「埋火」が冬の歌に詠まれていることから冬の主題の一つとして捉えていたことが確かであろう。しかも、相模の湯走百首や和泉式部百首の冬に「埋火」を主題した歌がみられることから、少なからず、百首歌において「埋火」は冬の主題として意識されていたことが知られるだろう。

『堀河百首』成立以前の勅撰集において、「埋火」が歌題として初出は『後拾遺集』のみであり、冬の部立に

402 うづみ火をよめる

素意法師

うづみ火のあたりは春の心ちして散りくる雪を花とこそみれ  
と一首のみ配列されていることから、勅撰集において「埋火」は冬の歌題とされ、しかも、勅撰集の歌題としては比較的新しい歌題と言えるだろう。また、『堀河百首』成立以後の勅撰集においては『新古今集』まで見られず、冬部に一首(689)配列されているのみである。このように、勅撰集において「埋火」が冬の歌題として比較的新しく、しかも、冬の歌題として常に定着されていた歌題とは言い難いであろう。

『堀河百首』成立以前の歌合の歌題として初出は、永承四年十二月二日庚申六条斎院禊子内親王歌合(『平安朝歌合大成増補改定』<sup>1237</sup>)と言えるだろう。歌題は、冬の五歌題(「神楽」「雪」「氷」

「歳暮」「待春」の他に「埋火」の歌題が付け加えられている。

のちに女房、埋火といふ題をだしたるを、男

21 埋火の消ゆるけしきに冬の夜のふけゆく空のほどを知るかな

22 円居して袖やはさゆる埋火のあたりは春のここちこそしれ

23 膳夫のきみがためにと埋火は万代経ともいつか消えせむ

24 埋火の下にはいたく燠ゆれども上はつれなきものにぞありける

長官少将長房

25 消えかえり下にこがるる埋火はけぶりばかりぞしるしなりける  
とあり、萩谷朴氏は「規定の五題の他に加えられた埋火題の如きは類例の極めて稀なものである。」と指摘されている。<sup>63</sup> このように、「埋火」は管見の範囲で永承四年十二月二日庚申六条斎院禊子内親王歌合のみであり、歌合の歌題として類例の少ないものと言えるだろう。また、「埋火」は、冬の季節を意識した歌題であり、冬の歌合の歌題とするに当っては『曾祢好忠集』や初期百首歌の影響と考えてよいであろう。

以上のことから、「埋火」が冬の歌題として比較的新しい歌題であり、歌題として定着するに当っては『曾祢好忠集』や初期百首歌の存在を無視できないであろう。また、既に、指摘されているように、堀河百首題が設定される際、初期百首歌の主題からの大きな影響を受けている。<sup>64</sup> このことから、『堀河百首』の冬の歌題として「埋火」が選択されるに際して、やはり、『曾祢好忠集』や初期百首歌の影響に拠るものと考えて間違いないであろう。

## 二

『堀河百首』詠出歌人達はどのように歌題「埋火」を捉え、詠じ

ていたかを具体的に検討を加えてみよう。

まず、堀河百首題「埋火」の詠出方法を検討して見よう。

堀河百首題「埋火」の十六首のうち、十二首が縁語や懸詞によって技巧を用いた詠歌が多くを占めている。その十二首を具体的にみてみよう。「埋火」の縁語として「焦がる」に「恋がる」や「漕ぐ」を懸ている歌は六首（1089・1090・1092・1095・1098・1099）あり、縁語の「熾す」に「起こす」を懸けている歌や縁語、懸詞として「燃える」や「消える」のいずれかを詠み入れた歌や複数の縁語、懸詞に拠った歌も見出される。

まず、「焦がる」に「恋がる」を懸ける歌は次のとおりである。

1089 埋火の下にこがるるかひなしやきえも消えずも人のしらねば

1090 ほにいでてまだおきながら埋火の舟ならなくにこがれこそすれ

1092 埋火の下にこがるるけしきこそつれなき人にみせまほしけれ

1095 夜とともに下にこがるるうづみ火のうへつれなくて世を過すかな

な

1098 うつみ火は恋する人の心かなうへはつれなく下はこがるる

1099 下はもうえうへはつれなき埋火のこがれぞあかす冬のよなよな

「埋火」の歌で「焦がる」に「恋がる」に懸けた恋愛歌の類例としては、前掲の『相模集』275や『和漢朗詠集』の業平の歌（366）の歌例が挙げられ、二首とも「下にこがる」とある。

366 埋火のしたにこがれしときよりもかくにくまるるをりぞわびしき

275 埋火にあらぬわか身も冬の夜におきながらこそ下にこがる

前掲の六首のうち1090・1099の歌以外は「下にこがる」とあり伝統的な詠法取り入れた歌と受け取れるであろう。

殊に、公実の歌（1089）は、「焦がる」と「消える」という対の縁

語・懸詞を用いて恋情を詠出している。また、匡房の歌（1090）のように「焦がる」に「恋がる」や「漕ぐ」を懸け、しかも「帆」「沖」「漕ぐ」は「舟」の縁語を用い、それぞれ「炎の火」「熾き」「恋」に懸け技巧を凝らした恋愛歌に仕上げられている。このように「舟」に関連した縁語や懸詞に拠った歌例として管見の範囲では相模の走湯百首Bの歌（374）一首みられ、少なからずその詠歌の趣向を求めたと考えられるであろう。

374 埋火も君にもあらぬあま舟も冬はうきよにこかれてそゆく

このように匡房の歌は、堀河百首題「埋火」において「舟」が詠み入れられ、「舟」に関連した縁語や懸詞を屈指した特徴的な一首と言えらるだろう。

次に、「埋火」の縁語として「熾す」を「起こす」に懸けた詠歌は次の三首である。

1091 いふ事もなき埋火をおこすかな冬のね覚めの友しななければ

1093 山さとにひとりぬる夜は埋火も板まの風にふきおこされて

1102 うづみ火の下の心をしらずして消えもやすとおきゐてぞみる

「埋火」の歌において、「熾す」を「起こす」に縁語、懸詞に拠った歌例として前掲の『躬恒集』245、「相模集」275、「和泉式部集」167、『和泉式部集続集』563や『四條家下野集』148と数多く挙げることが出来き、それらを踏襲した歌と言えるだろう。また、「埋火」を詠むに当って縁語、懸詞「熾す」は伝統的技法と言えるであろう。殊に、肥後の歌（1102）は、「熾す」「消える」という対の縁語や懸詞を用い表現技巧を凝らして恋の歌に仕上げている。

次の五首は「消える」（1089・1094・1096・1097・1102）や「燃える」（1099・1104）という「埋火」の縁語や懸詞によって詠作された歌である。

1089 埋火の下にこがるるかひなしや消えずも人のしらねば

1094 うづみ火のきえなでとのみおもふかないきてくゆれどかいしな  
ければ

1096 いかにせんはひの下なる埋火のうづもれてのみ消えぬべき身を

1097 鶯のなかぬばかりぞうづみ火のきえせぬ宿は春めきにけり

1099 下はもえうへはつれなき埋火のこがれぞあかす冬のよなよな

1102 うづみ火の下の心をしらずして消きもやするとおきあてぞみる

1104 よもすがら上はつれなきうづみ火の下にはもえて思ふとをしれ

源頭仲の歌(1094)は「埋火」の縁語として「消える」のみでなく、

対となる縁語として「活る」に「生る」を懸け、「燐ゆる」は「悔

ゆる」に懸けて、表現技巧を屈指して沈淪する心を描いている。し

かも、「埋火」の縁語、懸詞として「消える」は、前掲の『曾祢好

忠集』くれの冬の一首(345)に

345 うつみひのしたにうき身となけきつつはかなくきえむことおし

そおもう

とあり、この詠歌が初出の例歌として挙げられるであろう。また、

埋火の歌で「消える」縁語、懸詞とした例歌は多数見出され、永

承四年十二月二日庚申六条斎院様子内親王歌合において三首(21・

23・25)挙げられる。

21 埋火の消ゆるけしきに冬の夜のふけゆく空のほどを知るかな

23 膳夫のきみがためにと埋火は万代経ともいつか消えせむ

25 消えかえり下にこがるる埋火はけぶりばかりぞしるしなりける

また、縁語懸詞「活ける」について管見の範囲では歌例を挙げる

ことがでず、新しい縁語、懸詞と受け取ることができるであろう。

だが、『堀河百首』の詠出歌人である基俊の歌集である『基俊集』

188 (『私家集大成2』68)に

有女の、うつみひ、はなたちはなといふたいよみてみせよと

いひしかは、おもふころありて

188 よもすからした消かへる埋火のいけらは君に逢みてんやは

とあり、「埋火」の縁語や懸詞として「消える」、「活ける」という

対の表現を拠った歌がある。この歌と源頭仲の歌(1094)と先後関係

は判らないが『堀河百首』詠出時期と近接してゐる時期の歌ではない

かと推測が可能であろう。

このことから考えると、「活ける」は新しい縁語、懸詞であるが、

少なからず、『堀河百首』の詠出時期には縁語、懸詞として「活け

る」が詠まれ、「消える」との対表現に拠った詠法がなされていた

ことが判明されるだろう。

また、「燃える」も「埋火」の縁語、懸詞として二首の歌(1099・

1104)以前に、例歌は見出せず、新かな縁語、懸詞として捉えること

ができるだろう。

次に、「埋火」の縁語、懸詞として「燐ゆる」を詠み入れた源頭

仲の歌(1094)は、永承四年十二月二日庚申六条斎院様子内親王歌合

に例歌として一首見出される。

24 埋火の下にはいたく燐ゆれども上はつれなきものにぞありける

このように、「燐ゆる」が「埋火」の縁語、懸詞として使用されて

いたことが知られる。

以上のことから、「埋火」において縁語・懸詞「燃える」「活ける」

は新奇なものと言えるだろう。また、縁語、懸詞「活ける」は『堀

河百首』詠出時代に例歌を挙げられ、詠出時期には詠まれていたこ

とが知れるだろう。そして、それら縁語、懸詞「消える」「熾す」

や「消える」「活る」等の対表現に拠る詠法は、詠出方法の新しい工夫の一つと言えるであろう。また、『堀河百首』成立以降には「埋火」のこれらの縁語、懸詞や対表現を用いた例歌が見られることは詠法定着の様子が伺えるだろう。

次に、歌題「埋火」の詠作方法の特徴を捉えてみよう。先に触れたように縁語と懸詞のみならず、「上下」や「つれない」と「こがる」、「つれない」と「燃える」というように対になる表現を用いている歌は四首（1095・1098・1099・1104）挙げられる。

1095 夜とともに下はこがるうつみ火のうへつれなくて世を過すかな  
1098 うつみ火は恋する人の心かなうへはつれなく下はこがる

1099 下はもえうへはつれなき埋火のこがれぞあかす冬のよなよな  
1104 よもすがら上はつれなきうつみ火の下にはもえて思ふをしれ

この四首はいずれも「上はつれなく」と「下はこがる、燃える」というように対になる言葉によって、秘めたる恋情を詠じている。また、同様に「上のつれなき」に拠って歌（1100）や「下に焦るる」「下の心」詠み入れた三首（1098・1092・1102）というように上下どちらか一方に拠った歌が挙げられる。

1100 人しれずおもう心はうつみ火のうへはつれなき心ちこそすれ  
このように、上下どちらか一方に拠った歌は、埋火の形態を活かしたものと受け取ることができるだろう。

このように、「上下」対の表現による恋の歌の例歌は多数挙げることができる。例えば、『順集』28（『私家集大成1』95）のあめつちのうたの冬に

28 ひをさむみ水もとけぬ池なれやうへはつれなきふかきわかこひ

とあり、『能宣集』68（『私家集大成1』118）のこひに

68 うもれ身のうへはつれなく有なからしたにはふかきこひもするかな

というような歌例を多数挙げるができ、このような恋愛歌における「上下」対の表現技巧は伝統的な技巧と言えるであろう。だが、管見の範囲において、「埋火」の歌において「上下」対の表現による恋の歌の初出は、永承四年十一月二日庚申六条斎院祿子内親王歌合に見出すことができる。

24 埋火の下にはいたく燐ゆれども上はつれなきものにぞありける  
この歌合の歌に典拠を求めたと思われるが前述の仲実の歌（1095）であろう。

このことから、詠作方法の特徴として、堀河百首題「埋火」は縁語・懸詞である「焦がる」のような伝統的な表現技巧を単に用いるだけでなく、「燃える」「活ける」のような新しい縁語・懸詞を用いながら、「上下」などの対を意識した表現技巧による詠法によって秘めたる恋情を際立たせた恋の歌を作り上げている。

### 三

次に、「埋火」の歌十六首において、典型的発想の詠歌を抽出してみると、次のとおりである。

「埋火」十六首のうち、九首は埋火を恋する人の心として捉え、恋情を表現しているのは次の九首（1089・1090・1092・1095・1098・1099・1100・1102・1104）である。

1089 埋火の下にこがるかひなしやきえも消えずも人のしらねば

1090 ほにいでてまだおきながら埋火の舟ならなくにこがれこそすれ

1092 埋火の下にこがるるけしきこそつれなき人にみせまほしけれ  
 1095 夜とともに下はこがるるうづみ火のうへつれなくて世を過すかな  
 1098 うづみ火は恋する人の心かなうへはつれなく下はこがるる  
 1099 下はもえうへはつれなき埋火のこがれぞあかす冬のよなよな  
 1100 人しれずおもう心はうづみ火のうへはつれなき心ちこそすれ  
 1102 うづみ火の下の心をしらずして消えもやするとおきあてぞみる  
 1104 よもすがら上はつれなきうづみ火の下にはもえて思ふとをしれ  
 いずれも前述のごとく、伝統的な縁語、懸詞でなく、新しい縁語、懸詞や対の表現技巧などの詠法の工夫によって、埋火に秘めたる恋情を寄せて詠じている。

「埋火」に寄せて、述懐の発想に拠る歌として、二首(1094・1096)が挙げられる。

1094 うづみ火のきえなでとのみおもうかないきてくゆれどかひしな  
 ければ

1096 いかにせんはひの下なる埋火のうづもれてのみ消えぬべき身を  
 このようにいたずらに世を経る我を慨嘆している述懐歌として  
 「埋火」を詠じている。「埋火」をこのような発想に拠る初出歌とし  
 て、前掲の『曾祢好忠集』くれの冬、十二月はじめに

345 うづみひのしたにうき身となけきつつはかなくきえむことおし  
 そおもう

が挙げられる。この二首の歌(1094・1096)は、この好忠の詠歌を発想  
 の典拠としものと言えるであろう。また、『堀河百首』の詠出歌人  
 である永縁の歌に同様の発想による歌が、『新古今和歌集』第六冬  
 の歌に

うづみ火をよみ侍る

689 中にきえはきえなで埋火のいきてかひなき世にもあるかな  
 とある。永縁は『堀河百首』の詠出歌人であることからこの歌と前  
 掲の二首(1094・1096)の先後関係は判らないが同様の発想に拠る歌と  
 言える。また、『同百首』成立時期に近接した歌と想像が可能であ  
 る。そして、『同百首』成立時期には「埋火」を述懐の発想によっ  
 て詠まれていたことが知られ、しかも、既に指摘されているように  
 初期定数歌の趣向は好忠詠が関与している歌がほとんどであるとい  
 うことから、この発想も好忠詠の影響を表したものと言えるだ  
 ろう。(5)

これら二首の影響関係については軽々しく言えないが、殊に、  
 俊頼は好忠に注目し顕著な影響を受け、『堀河百首』において俊頼  
 の歌は述懐歌として詠じた歌が多数を占めていることや源頭仲は  
 『同百首』を遅れて提出したことから考えると、源頭仲が俊頼の発  
 想の影響を受けたと想定することも可能であろう。

また、『新古今集』において「埋火」は埋火に我が身の慨嘆を詠  
 じていて、述懐の本意とする歌題として捉えていたと推測出来るで  
 あろう。

「埋火」によって冬の夜の風情を詠じている歌として五首(1091・  
 1093・1097・1101・1103)が挙げられる。

1091 いふ事もなきうづみびをおこすかな冬のね覚めの友しなければ

1093 山ざとにひとりぬる夜は埋火も板まの風にふきおこされて

1097 鶯のなかぬばかりぞうづみ火のきえせぬ宿は春めきにけり

1101 埋火のあたりに冬はまとゐしてむつがたりすることぞ嬉しき

1103 ね覚してかきおどろかす埋火ぞ冬の深き友には有ける

この五首いずれも冬の風物として埋火を捉えているが、そのうち

四首（1091・1097・1101・1103）は埋火の暖かを発想としており、その発想の詠歌は以前に多数認められ、歌語まで典拠を求めた歌も認められる。

師時の歌（1097）は、『和漢朗詠集』363や『後拾遺集』402に、隆源の歌（1101）は、永承四年十一月二日庚申六条斎院裸子内親王歌合の歌（22）に発想や歌語を求めたと考えられるであろう。

363 看無野馬聽無鶯 臘裏風光被火迎

402 うづみ火の辺りは春の心ちして散りくる雪を花とこそみれ

22 まどゐして袖やはさゆる埋火のあたりは春の心地こそすれ

この三首は、いずれも冬の風物としての埋火の歌であり、埋火の暖かさを春に寄せた歌と受け取れる。これらの歌に歌語や発想を求めた歌であり、新しい発想の歌と言ひ難いであろう。だが、隆源の歌（1101）は、埋火よりも睦まじく語り合う嬉しさに視点をおいた趣向の新しさを求めた歌と言えるだろう。

前掲の五首のうち次の三首（1091・1093・1103）は、特徴的な歌語に拠って冬の風物としての埋火の詠歌と言えるだろう。

国信の歌（1091）や紀伊の歌（1103）の二首は、いずれも「寢覚め」「友」が詠込まれ、埋火が冬の友であるとし、同類の発想による歌といえるだろう。しかも、国信の歌は、「寝る」と「起きる」という対になる縁語懸詞を用い、技巧を屈指したものと言えるであろう。この二首以前に歌題「埋火」において、「目覚め」「友」又は「目覚めの友」が詠まれている歌は見出だされない。「寢覚め」を詠み入れた歌例は多数みられるが、「埋火」の歌題の詠歌において「寢覚め」を詠じた歌は『四条宮下野集』148に見出だせるのみである。

「埋火」といふ題を

148 片敷の袖やさえまし埋火の寢覚め床におきさりせば

この歌は、「埋火」の縁語、懸詞であり、しかも「寝る」と「起きる」という対になる表現に拠った歌であり、国信の歌（1091）に影響を与えた歌と推測することも可能であろう。

だが、「寢覚めの友」は、『堀河百首』の詠出歌人である肥後の家集『肥後集』76（『私家集大成2』55）に

かたらひ山のもと、きす

76 さよふけてかたらひ山のもと、きす一人寢覚めの友ときくかなとあり、また、藤原仲実の歌学書である『綺語抄』上（『歌学大系別巻1』）に

やまざとのかけひの水はいつよりも冬のねざめのとこそなれ

この二首の歌と『堀河百首』二首（1091・1130）詠出の前後は判断出来ないが、いずれも「寢覚めの友」が詠み入れており、これらのことから考えると、少なからず、『同百首』の詠出歌人および同時期には詠まれていた歌語であることが明らかであろう。

また、『同百首』以降において「埋火」の歌題の歌に「寢覚めの友」を詠み入れた歌例がみられることからこれら歌の影響と捉えることが可能であろう。このことから、「寢覚めの友」は新しい歌語であり、歌語として定着の様子を見出すことが出来るであろう。

このように、国信の歌（1091）と紀伊の歌（1103）は「埋火」を詠出に当って、「寢覚めの友」という新奇な歌語に拠った特徴的な詠歌であり、互いに影響しあうような場の存在が考えられるような歌であろう。

次に、万葉語を用いた詠歌として顕季の歌（1093）を挙げることが



出来るだろう。

1093 山ざとにひとりむる夜は埋火も板まの風にふきおこされて

この歌の「板間の風」は、『万葉集』の歌(2342)に

2342 霰落 板敢風吹 寒夜也 旗野尔今夜 吾独寐寐

とあり、二句目は「板間の風」と訓れている。しかし、『万葉集』

の底本には、「板敢」とあるが、伝本によって異なっている。この

「板敢」に関しては古注釈においても諸説がみられる。<sup>(6)</sup> また、こ

の歌は『古今和歌六帖』第一帖の天の部に於いて、霰に分類されて

765 霰ふりいたま風吹きさむき夜にはたやこよいもわれひとり寝む

とあり、二句目は「板間の風」となっている。

これらのことから、顕季の歌(1093)は、『万葉集』の「板間の風」

となっている伝本や『古今和歌六帖』の歌を典拠としたと考えるこ

とが可能であろう。

「板間の風」は、管見の範囲において顕季の歌(1093)以前には『定

頼集』(『私家集大成2』18)に一首(83)見出せるのみである。

83 故郷の板まの風にねさめつゝたにの風を思いこそやれ

この詠歌は、『栄華物語』第二十七、にひかれて、公任親子の贈答

歌であり、「板間の風」は歌例が極めて少ないことから新奇な歌語

と言えるであろう。

また、顕季の歌以降、「板間の風」詠み入れた例歌が見られ、し

かも、『八雲御抄』第三枝葉部 天象部の風の項目に「板間 万葉」

と書かれていることから考えても「板間の風」は万葉語捉えていた

ことが知られる。

このようなことから考えると、顕季の詠歌以後、「板間の風」を

詠じた例歌や『八雲御抄』等に見出だされることから考えると、

「板間の風」は万葉語として定着の様子が指摘出来るだろう。また、

顕季の歌の特徴としては、『万葉集』を本歌とする歌が数多く詠ま

れていることから、「板間の風」も『万葉集』に典拠を求めたもの

と捉えることも可能であろう。そして、歌題「埋火」の歌において、

顕季の歌は『万葉集』に、新奇な歌語を求めた特徴的な一首として

挙げられるだろう。

このように、「寝覚めの友」や「板間の風」というような、あま

り使用されていない珍しい歌語による詠法は詠出歌人達の工夫の一

つとして取り上げることが出来るであろう。

このように、幾つかの類型的な発想に拠って見てきたが、いずれ

の発想も『堀河百首』独自の発想と言え難く、以前の発想を基に詠

出歌人達は新奇な技巧の詠法や新しい歌語や万葉語を求めるとい

うような詠法の工夫に拠る新しい趣向として受け取れるであろう。

#### 四

以上のことから、堀河百首題「埋火」において技巧的な詠法や類

型的な発想が見られる。殊に、詠法の特徴として埋火の縁語、懸詞

拠る技巧的な詠歌が多数を占めている。その多くは伝統的な縁語、

懸詞である「焦がる」を用いながら、上下のような対称表現による

技法である。だが、匡房の歌のように伝統的な「焦がる」を用い

ながら「舟」に関連した縁語や懸詞を屈指した詠法や「燃える」や

「活ける」というような新奇な縁語、懸詞によつての対表現は詠作

方法の効果的な工夫の一つであろう。

類型的発想においては、幾つかの類型的発想があり、「埋火」に

秘めた恋を託した伝統的な発想の他に、はかない我が身や身の埋ず

もれあるかなき身とし述懐の発想や冬の風物として埋火を詠んでいる。それらはいずれも新しい発想は見出だされないが、それを基として新しい展開がなされているのは確かであろう。また、『和歌題林抄』には「うづみ火はあたりまで暖かなる心をよむ、いきてよにきえぬいのちなどもよそへて、身のうづもれながらあるかなきかのよしをもそへてよむべし」とあり、いずれも『堀河百首』の「埋火」の詠作方法であり、それらが詠作の規範として定着し、題意として発展していったと捉えてよいであろう。

また、新しい歌題である「埋火」を詠出するに当って、既に指摘されているように、いくつかの類型的な発想や詠作方法が挙げられるのは歌人達が詠出にあたり互いに学びあえたものではなからうか。<sup>(7)</sup> また、新しい歌題である「埋火」を詠むに際して技巧的な詠作方法のみならず、新奇な歌語を求めた詠作方法は、創意工夫をしている詠出歌人達の姿が想像されるだろう。

〔注〕

- (1) 橋本不美男、滝沢貞夫著『校本堀河院御時百首和歌とその研究 本文研究編』（昭51 笠間書院）
- (2) 三原まきは著「歌題の確立と変遷」（『学習院大学国語国文学誌』38 平7・3）
- (3) 萩谷朴著『平安朝歌合大成増補改定』2（平7 同朋舎出版）
- (4) 家永香織氏「『堀河百首』と屏風歌・初期定数歌」（『国語と国文学』四月号 平10・4）
- (5) 注（4）に同じ。

(6) 『万葉集代匠記』に「板歌を板まよめるやう心得かたし。もしこれはいたくとよむべきか。」とあり、『万葉集考』には「敢」を「玖」の誤りと推測して、「イタク」と訓んだ。等

(7) 竹下 豊氏「堀河百首」成立事情とその性格——堀河百首研究（1）——（『女子大国文 国文篇』第36号 昭61・3）

本文に引用した『万葉集』『古今和歌六帖』『和漢朗詠集』『後拾遺集』『堀河百首』『新古今和歌集』は、『新編国歌大観』（歌番号も同本による）に拠る。ただし、表記については改めたところがある。